

あとがき—産研論集閉刊にあたって

『産研論集』は、今回の50号刊行をもって残念ながら最終号（閉刊）となる。

本機関誌の第1号が刊行されたのが1991年であり、経営学部附属産業経営研究所の機関誌として誕生した。もっとも同研究所の機関誌は1982年にまで遡り、『産業経営研究所論集』（1982～1990年）がその前身である。その意味では34年間にわたり機関誌を発刊してきたともいえる。

本学経営学部は1968年に開設され、本来であれば2016年で48年目を迎えるが、その3年前（2013年）の組織再編により、経営学部は事実上廃部となり、13専攻を束ねる地域共創学群に編入され、経営学部教員の多くは、経営学専攻に組織母体を移すことになった。また、それを機に経営学部へ附置されていた産業経営研究所も地域共創学群の総合研究所に吸収されることになった。この時点ですでに機関誌の『産研論集』も閉刊になることは自明の理ではあったが、その後、産業経営研究所から経営学部の研究機関誌として今日まで継続刊行できたことは、ひとえに経営学部教員がこの機関誌に愛着心をもって投稿論文を寄せてくれたことに尽きる。

かつて附属産業研究所が存在した頃には、当研究会が主催する「現代企業研究会」が毎月のように開催され、多くの研究者がこの研究会をつうじて相互研鑽し、日頃の研究成果を機関誌に投稿するなど活況があった。その現代企業研究会も2010年3月30日に開催された第151回研究会を境に活動が途切れ、今なお休止状態にある。

それでも『産研論集』が1991年に誕生してからちょうど25年目の2016年に50号を迎えることができたことは、およそ2回のペースで刊行してきたことを意味するものであり、いかに多くの研究所員がこの機関誌に研究成果を掲載してきたかがわかる。

筆者は1997年に札幌大学に赴任し、その後19年間、研究所員として、また『産研論集』の編集委員として関わる機会に恵まれた。編集委員として関わることができたことにより、筆者は投稿者からの多くの論文を拝読するという恩恵を受けただけでなく、原稿提出締切日に向けて、自らもそれまでに何かしら日頃の研究成果をまとめようとする目標を持つことができた。もっとも本機関誌は、筆者にとってまだ熟していない論考を、気軽にDiscussion Paperとして公表できる場でもあっただけにとっても残念でならない。

今回の最終号ではかつて本学経営学部にて在籍し、『産研論集』にも多数、研究成果を寄稿頂いたOB教員はじめ、他大学に転籍された気鋭の研究者にも寄稿頂いた。懐かしい執筆からの原稿を前に、不思議にも筆者が本格的に編集委員として携わるようになった10年前に遡ったような心地よい錯覚に陥った。経営学部の機関誌『産研論集』は本号をもってその役目をひとまず終えるが、本学から経営学研究そのものが失われるわけではない。むしろこれを機にもっと本学OBや他大学に転籍された研究者からも投稿してもらえよう環境づくりをしていきたい。

最後に厳しい出版事情にありながらも、本機関誌最終号のために無理を承知で快く出版をお引き受け下さった柏楊印刷株式会社の森木準二様には編者一同、心より御礼申し上げたい。また、本学の印刷室、山崎様にも厚く御礼を申し上げたい。

（文責 中山健一郎）